

時代を駆ける：岡部健／8 「患者の目」より厳しく

◇TAKESHI OKABE

《宮城県名取市の小さな診療所は次第に成長し、スタッフは総勢約80人に。全国から研修生が来たり、講演に招かれる機会も増えた》

仙台の患者が増え、数年前に出先事務所を2カ所構えました。さらに、診療所にいた医師が福島でやりたいと言うので、福島市にも爽秋(そうしゅう)会のクリニックを開きました。各地域で医師、看護師、介護士らがチームをつくり、訪問診療しています。

在宅でみとった患者は09年で352人。9割ががん患者です。がんのみとり数は全国で一番多いと思います。ニーズがあったので普及させたら、社会も変わってきた。始めた当初は「何それ」という反応でしたが、病院が患者に提示する選択肢の一つになりました。

《訪問診療ならではの厳しさもある》

患者の生活の場に入るわけですから、信頼されなければなりません。病院なら患者が医者嫌いを、来なくなるだけ。患者に決定権がある在宅の場は、よりシビアです。

骨肉腫だった20代の女性は、毎晩9時ごろになると電話してきました。脳への転移で神経が興奮し、極度の不眠を訴えた。薬を変えても効かず、麻酔薬まで使いましたが「寝られない」と起き上がる。毎晩「ヤブ！」と責められましたが、結局ある鎮静剤が効きました。彼氏とディズニーランドに行きたいと言うので看護師を1人付け、離れた所から様子を見させたことも。彼女が亡くなった今でも、その声は耳に残っています。

《70年代までは、自宅で最期を迎えることは日常的な光景だった》

人が亡くなるのは本来、自然な現象ですが、医師は病気という「異常現象」にしか対処できません。がんの痛みを取ることができても、患者を支えるにはチームが必要です。臨終の際はなるべく家族だけで過ごしてもらうように心がけています。

緩和ケアは、苦痛を和らげるだけでなく、患者の希望をかなえて生きる手助けをすることと、世界保健機関(WHO)が定義しています。病院以上にコミュニケーション能力が求められますが、患者や家族から学んでいくしかないのです。

=====

聞き手・下桐実雅子(写真も)／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇おかべ・たけし

栃木県小山市生まれ。医療法人爽秋会理事長。日本ホスピス緩和ケア協会理事。61歳(写真は05年、仙台市の患者宅で診察する岡部さん)